

平城宮東院地区の調査(平城第401次)

10月から12月にかけて、平城宮の東端に位置する東院地区を発掘しました。調査場所は、現在復原公開されている東院庭園駐車場のすぐ北側になります。

今回の調査では、掘立柱建物、掘立柱塀、石組溝といったさまざまな遺構を確認しました。これらの建物の柱穴はいくつも重なり合っていたので、奈良時代の約70年の間に建物が頻繁に建て替えられていることがわかりました。

なかでも、奈良時代前半と後半では掘立柱塀が大きく建て替えられていることは注目されます。塀は土地を区画するための構造物なので、塀の変遷が明らかになるということは、その土地の利用の仕方がわかることにもなるのです。すなわち、奈良時代前半では東院内部の西半部をさらに二つに分割していたのに対して、奈良時代後半には東院の中核部分を含む中心部分をひとつの区画として広く利用していた状況が考えられます。平城宮内でもこのような大きな区画の変化はあまり見られません。想像力を膨らませると、767年に新成する宮殿である「玉殿」との関係も垣間見えてくるのでしょうか。

今回確認した建物は決して大きくはありませんが、なかには桁行14間以上×梁行2間の南北に長大な掘立柱建物も見つかっています。このような長い建物は一般的に脇殿や回廊とされることが多いのですが、残念ながら今回の調査ではこの建物の性格を明らかにすることはできませんでした。

多くの石組溝が確認されたことも興味深いことのひとつです。南へ水を流すための石組溝はほぼ同じ位置で造り替えられており、これも奈良時代後半の大きな改変を伝える一例と言えるでしょう。



調査区全景(北から)



下層調査の様子(北から)

また、二彩の土器、緑釉の瓦や磚が出土しました。瑠璃瓦葺きの「玉殿」があった東院地区に相応しい遺物と言えるかもしれません。これらはなかなか見応えのある遺物ですので、平城宮資料館での展示の機会には是非お越しください。

12月9日(土)には現地説明会をおこないました。あいにくの雨模様にもかかわらず、約450人もの方々にお越しいただきました。あらためて、感謝申し上げます。

今年度から、東院地区の調査は毎年継続的にようになっていく予定です。東院地区はまだ未解明な部分も多く、調査が進むごとに新たな展開を迎えるとともに、これまでの調査の見直しも必要になってくることでしょう。今後の調査・研究の進展に是非ともご期待ください。

(都城発掘調査部 和田 一之輔)



石組溝の付け替え(北東から)